

報



會

會 岳 山 本 日

107

月 七 年 六 十 和 昭

「山の繪」に求む

高橋文太郎

山の繪を観ることは、今でも享しみにほゞ變りはないが、以前ほど熱意をもつてゐない。それは熱意をもたうと思つても、已むを得ないのである。この原因は、山をモチーフとした優れた良い繪が、渺いからだ。

自分は山が好きだつたから、セガソニの畫集などよく首引きをしたものだが、マチスとかルオー或ひはドランなど一流の作家などの作品を見るやうになつて、誠にたとひセガソニのものでも、つまらない感じがしてきたのである。セガソニの繪には、彼獨特の、山麓の生活をよく味つた深さがある。しかし結局繪の美しさといふものは、その題材にはよらないのである。山を扱つた繪よりも、他のモチーフのもので、より美しいのがあれば、私は後者の方に心を打たれる。それは「君が山とか登山そのものに以前のやうな熱意をもたない偽めではないか」と、反問されるかも知れない。しかし繪そのものの比較において美しい方が美しいのは云ふ迄もないことだ。

尤も、マチス流の新鮮な現代畫

を好む人とブリューゲルなどの北歐的なものと古典的な暗い繪を好む人とはある譯で、好みは自づと人によつて別れてくる。だから、恐らく山好きの人でも、安井曾太郎氏の描く神河内の山々が判らない場合は多いと思ふ。しかし藤島武二氏の臺灣の山なら判ると云ふ人が多いかも知れない。例へば、手近く日本山岳畫家協會において若手の染木照君やその他の新しい趣向の繪は山の繪らしくないが、中村清太郎さんの繪なら判るといふ人々も多いことだらう。要は、その人個人の鑑識力の程度によつていろいろの結果が出てくる。

私はこの山岳畫家協會——日本山岳會と關係の深い——が誕生した頃、随分このグループの作家に期待をもつてゐた。處が、會が一年一年と續くにつれ、會員の多少の新陳代謝があつたにせよ、空氣は年を逐ふてよどみ、出陳される山の繪は年を逐ふて、陳腐なものとなつてくるやうな氣がする。勿論二、三の他の會に所屬してゐる作家の繪は別問題に屬するが、然も私は以前に特殊な新しい意識をもつた山を描く作家によつて生れた……といふやうな詞を記したやうに記憶するが、結局、山に登り或は山を歩くといふ體驗と藝術的な作畫の仕事とは、必ずしも

兩立するものでない事を感じ、自らをむしろ反省せずには居られなくなつた。

結局、作畫に對する修練、その制作上の技術、そのモチーフに對する作家の觀照態度などといふものが、一つの繪を描く時は物を云ふので、山に登つており、そのスポーツに水い經驗があるからと云ふことは、全く氣休めの口實的な價值しかない事がむしろ多いといふことを感じた。

十九世紀以降の歐洲アルプスで山の繪を描いた畫家群——例へばコンプトンとかヴィーランドなど——これらはその中でも比較的上手な方なのだが、矢張り「スポーツマンとしての畫家」以上には何ら出てゐないことを見出す。山を歩くことが好きで、山を描くといふことは鬼に金棒の筈なのだが、之らの山の作家群から一人として傑出した人は出ない。セガソニの域まですら達した人はないのである。

結局、山に登らなくてもすぐれた山の繪は描けるので、但し花や家を理解するほどに、山にも理解をもつてゐれば作畫がやり易いといふまでのことである。

いはゆる山岳人をもつて任する畫家の弊として、氣持の昂揚のみに浸る怖れなしとしない。山への

高い精神は勿論必要である。しかし、山の繪はこの單なる氣持許りで描かれるものではない。それに伴ふ畫技の修練こそ、必要であると思ふ。

鑑賞者の側意慢も、ない譯にはいかぬやうに思ふ。もつと、山の繪許りでなく、汎くよい美術に接

目 次

・「山の繪」に求む……

……高橋文太郎……一

・積雪期の荒澤奥壁南校……二

……東大スキー山岳部……二

・積雪期木曾駒達連に於ける二つの横斷……

……跡部・小島……四

・スウイス版「民族の足」……六

……水野祥太郎……六

◆法人改組記念講演映畫會・關西第一回研究會……八

◆圖書紹介・會務報告……九

◆組寫眞集「山と生活」……九

◆寫眞募集豫告……二二

◆本會財産目録……二三

して眼を肥さねばならない。あの尾根の巒が一つ足りないとか、あの山のピークが二つ描き足りないとか、といった寫眞を視る時のやうな詮議をせず、もつと繪畫に對する眞の鑑賞眼を養ふことがまづ求められる。



積雪の期

鹿島槍荒澤奥壁南稜

東京帝大スキー山岳部

まへがき

後立山連峯の盟主鹿島槍の懐深く鹿島大川澤が噴込む源流には、幾多の障壁が形成される。それ等の中、東尾根と天狗尾根に挟まれる荒澤奥壁は、豪壯雄大といふ點に於てはカクネ北壁に一步を譲るが、狭い荒涼たる谷には底知れぬシュルシドが口を開けて奥壁に近づくを阻み、又東尾根第一岩峯から殆んど垂直に北俣に落ち込む六百米の壁は險惡を極め、カクネ北壁にやうやく積雪期初登攀の凱歌が擧げられた後と雖も、處女岩壁の誇も高く安曇野の彼方に聳立して居たのである。

併し昭和十年七月遂に荒澤奥壁の北稜と南稜とが同時に浪速高校パーティによつて初登攀された。その後積雪期には容易に人を寄せ付けなかったが、昭和十二年三月

に至つて東京商大の精銳小谷部、森川兩氏によつて北稜が完登された。けれ共南稜は未登のまゝ今日迄残され、今回の我々の登攀となつた次第である。前の二つの登攀は「關西學聯報告7號」及び「針葉樹9號」に夫々掲載されて居り、そこには今西氏及び小谷部氏によつて荒澤の地形及びそれ以前の登攀の歴史が詳細に説明されてあるから、それを参照して戴くことにして、茲ではカクネ北壁及び荒澤奥壁攻撃の根據地に就いて一言してそれを補ひたいと思ふ。

根據地として最も好適なのは天狗の鼻にキャンプを設置することである。何となれば取付に際しては天狗の鼻から、カクネ及び荒澤北俣に落ち込むルンゼを下降すれば直接北壁及び奥壁の底に出ることが出来、又歸途に於ても荒澤の頭から天狗尾根を下降するだけでキャンプに達することが出来、かくて壁自體の登攀の前後に於て體力を消耗するのを防ぎ得るからである。もし前進キャンプをツリ尾根に設置するならば、安全性は更に増加するであらう。そして天狗の鼻にキャンプを設置するには、普通二つのルートが考へられる。一つは、昭和十年から十一年の冬期に於て立教大學がヒマラヤ行に備へてボーラーシステムを實施されたときのルートで、鹿島村から鹿島大川澤を廻行し荒澤出合から天狗尾根の最端部に取付いて天狗の鼻に至るもので、途中我々がジャンクションと呼び慣れてゐる岩峯の下の中繼キャンプを設置する必要がある。その二は、昭和十二年春東京商大のとられたルートで、遠見尾根から白岳澤に下降しカクネ出合を経てカクネ里に入り、圓谷の底から天狗の鼻に登るものである。この場合には大遠見或ひは大遠見から白岳澤に出てゐる側稜の中途に、中繼キャンプを設置せねばならない。即ち二つのルートの中何れをとるにせよ、最少限二つのキャンプが必要とされる。かくて北壁及び奥壁攻撃に際して、多くの日数と強力なる援護隊が必要とされる事情は明白になつと思ふ。併し残念なことは、

我々はいふ條件に恵まれなかつた。それ故雪崩の危険の少ない夜中に荒澤谷底に潜入し、夜明けと共に奥壁に取付き、登攀後キャンプには戻らず冷澤小屋に逃げ込むといふ無理な行動に出でざるを得なかつたのである。

登攀

パーティ 佐谷健吉、伊藤文三、中山和世

昭和十六年三月二十二日——二十九日

二十二日 鹿島村。

二十三日 降雨のため停滯。

二十四日 荒澤出合まで第一回荷上。前日の雨が木の枝に凍結して、踊子の衣裳のやうに七色にきらめくのが美しい。今年は雪が少いせいか、いつもなら荒澤出合の少し手前に、デブリで架かるブリッジがない。橋を架けて渡る。

二十五日 第二回荷上。天幕を張り終へた午後五時、日も暮つて最早雪崩の危険も去つたと思つたので偵察に出掛ける。果して荒澤の谷底沿ひに奥壁に近づくことが出来るであらうか、積雪期には誰も通つたことのない谷底だけに、不安にかられながら狭い陰惨な谷底を辿つて行つた。やがて瀧にぶつか。左岸の岩壁についた雪を慎重にトラバースして辛うじて上に出ることが出来た。瀧の上部で

谷がグット屈曲するや急に開けて、荒澤奥壁がその全貌を眼前に展開する。そこからは東尾根側及び天狗尾根側から押出したデブリに埋まれ盡された谷底が蜿蜒と北俣入口まで續いて居る。愈々明日は奥壁へ突進することが出来るのだ、激しい闘志が心の中に湧いて来る。出来るだけ上までラッセルして置きたかつたが、日が暮れてしまつたので南俣出合から引返した。

荒澤出合の天幕の中ではオプティムスが青い焰をボウ／＼吹いて活動し始め、明日に備へて牛肉のバター焼を鰯腹つめこんだ。九時シユラフに入つたが、頭が冴えて寝つかれない。荒澤にまつわる思ひ出が走馬燈のやうに次から次へと浮んで来る。峯が月光に青白く輝いてゐた夜、遭難の報を受けて現場に急いだこと、激しい風雪の中を死體をのせた重い槌をひつぱつたこと、高校時代の熱情の凡てを山に誓ひ合つた僚友を失つた悲しみ、而も僕等の目標は東京商大の手に落ちてしまつたのだ、そして残る南稜と思ひ乍らも、それを果さずして櫻並木に花吹雪散る日、待機を下らねばならなかつたこと……。幾度か懐中電燈をつけて枕元の時計を見た。

二十六日 三時起床。四時半キ

荒澤奥壁



キャンプ出發。昨日のラッセルが終る頃早くも夜はほのぼのと明け始めた。どす赤い朝焼に絲を引くやうな雲が流れて天氣が不安だが、今日一杯はもつてくれるだらう。北俣入口から俄然股から腰まで潜り始める。先日雨もここまでは雪だつたに違ひない。喘ぎ乍らラッセルを続け八時南稜に取付く。先づ雪崩路の水に丹念にステップを刻み、その中途から露岩の下を控いて稜線に出ようとしたが、岩の下が悪く細いブッシュに掴まつたり、岩と雪の間に手をつつこんだ

りしてやうやく稜線に出た。平凡な雪稜がしばらく続き、それが切れて壁になる。南稜は北稜のやうな明確な稜をなさず、むしろ岩塊と稜とリンネの錯雑した壁と言つた方がよい。

オーダーをI-Sに變更して左手のアイス・リンネに入る。下から見ると簡単そうだったが、取付いてみるとツルツルのアイス・リンネでおまけに傾斜がとてきつ

い。Iは巧妙なバランスでビッケルを振ひ乍ら登つて行くが、ザイルは伸々延びようとしな

い。Iは巧妙なバランスでビッケルを振ひ乍ら登つて行くが、ザイルは伸々延びようとしな

て姿が見えなくなる。ザイルが延び切つたが、Iは確保の場所がないとどなる。ハーケンを打つ音が聞えて来る。Iの所まで行つて見ると、アイスハーケンがリンネの真中に半分程打つてあるだけだ。而も太陽の熱で今にも抜けさうだ。Iが一米程登つて露岩にハーケンを打つてやうやう安全感を取り戻す。そこでオーダーを變更し、Iの打つたハーケンに確保され乍ら突進する。リンネを少し出て右手の露岩にアイゼンを喰ひ込ませそれを連二無二つゝする。だが雪の一杯つまつたりリンネが相變らず續き傾斜は緩くならうとしない。ビッケルのシャフトをさしこみ、そうしてをいて足場を丹念に踏みかためるといふ機械的な勞作を繰返すだけだ。腕が抜けさうに疲れ果ててビッケルが伸々上へさしこめない。やつとリンネを抜けリンネと尾根の接合點を踏みならして取付以來初めて二人並んで休息をとる(一時)。ビスケットを囓らうとしたが乾き切つた咽喉を通らない。テルモスのココアを飲みペーストを少量舐めたのみ。そして二人とも無言でじつと坐つてゐた。

そろ／＼東尾根第一岩峯から出てゐる尾根にトラバースせねばならない頃だ、そして今見れば急な雪の斜面を距てゝそれらしい尾根があるが、ほんとにそうだらうか、壁の傾斜が益々急になつて行くので焦燥が心を掠める。又オーダーを變更してトラバースを開始し、三ビッチで尾根に着く。豫期通りの尾根だつた。荒澤の瀧はづつと下になつて隠れてしまひ、夏瀧の上部に雪溪となる急なリンゼが見えるやうになる。尾根には樺や、偃松が頭を出してゐるが、傾斜が急であり雪もやわらかいの



積雪期木曾駒連峯に於ける 二つの横断に關する報告(1)

跡部 昌三
小島 政士

雪の木曾駒連峯の上に、私達名古屋山岳會の仲間によつて二つの山行が、本年度に於て營まれた。その二つとも横断の型式を以てなされ、一つは木曾から伊那へ、一つは伊那から木曾へ、前者に於て本岳が越えられ、後者には南駒がその線上に據えてゐる。

本岳越えは昭和十四年の三月、私達によつて試みられた赤穂から上松へ(會報八七號「積雪期木曾駒に於ける二つの行爲」の「木曾駒本岳横断」の項を参照)の、スキー使用可否に就ての再検討を目的として遂行したものであり、南駒越えはオンボロ澤が第一の目標となり、更に横断が目論まれるに至つて、ケサ澤を仙居と南駒の鞍部から滑降しようとする事になつた。

本岳越えに於ては豫定より半日脚が出たが、目的を明らかにする

ことが出来た。南駒越えに於てはオンボロ澤に希望を果したが、二日の遅延を餘儀なくされ、且つその計畫の後半であるケサ澤降りを、天候にさまたげられてものにすることが出来ずに終つた。此の計畫期限の遅延に關しては述べてみたい事があるが、此の方は他の機會に譲つて、此處ではこの二つの行爲に對する簡單なる報告を以て終りたい。

スキーによる木曾駒本岳横断

スキーによる木曾駒本岳横断の行動を記述する前に、此の行の目的であるスキー使用價值如何に就てその得たる結果をまづ論及してみたい。今度の行に於て、同行の神谷のコンディションが悪くて時間的記録としては問題とするに足らず、また赤穂道の五合目以下ではルートから外れてしまつたが、その目的として採り擧げた對象に就ては充分に検討することが出来た。既記した如く、此のルートは昭和十四年の三月に赤穂から上松へ越えてゐる。今度之を逆に試みて先に得た收穫に對する再検討をなし、再確認への資としたいといふ處から此の行は出發してゐる。上松道のスキー使用價值の問題に關しては、私達の間では可成り久しい話題となつてゐたが、その結論は私達の積み重ねて來た經驗から、輪ガンよりスキーの方が遙かに有利であるといふ事をはつきりと知るに及んで、此の問題は茲に解消されることゝなつた。

或る人は、此處に短スキー論を持ち出し、輪ガンとのコンビを推奨するが、しかし、僅かな經驗に立脚して之を他の範圍に押し進める事は少し慎まねばならない事であつて、敢て言ふ迄もない事乍らスキーを携行せねばならぬ場合こそ短スキーの推奨となるが、穿いたときは長いスキー(普通のスキー)の方が登降共に能率的であり、有利であるといふ極めて判り切つた事を言はねばならない。勿論このことは、その雪質との關聯を無視しては成立しないことに留意すべきである。

輪ガンは雪の木曾駒連峯にはいとすれば、かゝる事の出来ない裝備の一つである。上松道に輪ガンを用ふるとしたら、最初からそのみにて遂行した方が賢明であり、スキーを持ち込みたい希望があれば、これのみにて押し切るべきであるといふ見解を私達はおもつてゐる。上松道のスキー使用範圍は、まづ八合目まであるが、時にはもつと上げられるやうに、その時の状態によつては所謂例外といふものを考へられはするが、大體に於てかく言ひ得る。下りはコンビなんて考へる必要はない。スキーならば、斷る迄もなく此處ではその地形から一般に思ふやうな滑降感を味ふことは不可能であるが、ほとんど滑り下ればよい。

スキーによる登行は、今度の場合五合目小屋に這入るほんの僅かな部分と、その後の胸突八丁、七合目前後の急坂にスキーを脱いで登つたが之位のものならば敢て輪ガンを用ふるまでもない。此の時の雪質は、私達をよく言ふ「駒特有の粉雪」であつて、やゝ粒状を呈し、さらさらとしてゐてよりどころのないこの雪では、直登には差支えないが、階段登りや、ジグザクを切つて登るに甚だ困難なものである。時にはラストしてゐる場合もあるが、概して薄くて破れ易く、その下は矢張りよりどころのない雪が充滿してゐる。この様なものが積雪期木曾駒では一番よく經驗する雪の状態である。

雪が締りさへすればスキーを擔がなくてもいい。春になつて堅雪になつた場合はアイゼンがものを言ふが、一旦ゆるむと股までもぐ様な濕雪を呈するのを常とする。従つてこゝでもスキー利用が他を壓してゐる。アイゼンを用ひて堅雪を登降し得ることは、積雪期木曾駒に於ては極く稀な部類に屬する。

赤穂道のスキー使用に就ては、會報八七號に言及した通り、木曾駒隨一のスキールートである事を再認し、更にそのよきに就て裏書せずにはゐられない。私達は此の赤穂道の樹林を月明をたよりに滑降を續けたが、その滑降の素晴らしさに、これが日中ならばどの様に愉しいであらうかと、繰り返し繰り返し口にした位であつた。雪の状態は木曾側と變りはないが雪量はぐつと多い。

五合目から清水平へのルートは日中ならばさほどの苦勞を必要とせぬが、この時は満月であつたが夜のこゝろ、それに疲れてゐたためあちこちするのもうるさく、遂に普通ルートを諦めて清水澤を滑

降した。しかしこのルートの方が所要時間は大であるが、また變つて興味深いものがある。

可成り降るとこの澤を横切る木馬道に出る。傾斜はないが、それにスキーを滑らせた。赤穂道の蛇腹小屋の前後のことを思ふと、この方がスキー利用といふ立場からずっと有利である。しかし木馬道は遙かに高く山腹を絡んでゐて一體何處まで續いてゐるのか。それに黒川發電所の上に當る少し手前では二ヶ所も崩れてゐたので、私は眞下に見える取入口へ行く道へ、鴨越えの坂落し式の簷漕ぎをやつた。此の斜面は伐木したあとらしく、言ふ程の簷でもない、雪は南面のためか大半以上は消えてなかつた。木馬道を尙先に進めば發電所の送水管あたりの路を利用出来るかも知れないが、實際歩いてみないから何とも言へない。

取入口への道へ出ると、この時はまたスキーがはけて、少し無理ではあつたが赤穂の町へ入るまでスキーが使へたのであつた。

雪の赤穂道を知らぬ人は、福島道のスキーを特筆大書するが、私は之に大きな疑問をもつ。福島道にスキーの快を言々するのは、あの玉ノ窪だけで、空木岳にスキーを推奨するのと同じ類である事を知つておかなくてはならぬ。

* * *

深夜の上松には筆々として粉雪が舞つてゐた。「ちよつとうるさいな」と惟ふより、上松の、しかも驟からスキーがはいて行ける方が遙かな喜びであつた、通ひなれた上松道を二本の筋をひいて四人のスキーは進んでゐた。二合目の小屋で夜の明けはなれるまで食事をしながらゆつくりと休憩し、すつかり明るくなつた二月十日の朝を迎へてから小屋を出た。もう雪は散んで居た。

小屋からは普通の登山道によらず木馬道を傳つて三合目の少し下へ出た。さしたる量ではないが、昨夜からの新雪のため、木馬道にスキーを進めるには手頃であつた。

三合目を過ぎる頃より神谷の調子がよくなく、それに歩調を合せ乍ら登つた。五合目の小屋のすぐ下では場が狭くてスキーを脱いで小屋へ這入つた。天候は次第によくならず、時折り薄陽が針葉樹の間から洩れてゐた。

スキーを着けて五合目の小屋をあとにしたが、間もなく始まる胸突八丁は、急坂のためにスキーでの直登は出来ず、さらさらの粉雪はいくら叩きつけても崩れるばかりでスキーのエッジがきいてくれ

ず、仕方なくスキーを擔いだ。胸突八丁を過ぎてからはまたスキーで登行を續けていつたが、七合目の前後でもスキーをぬいだ。此の時も同じ理由で、この雪質はシルの全面をきかして登り得る範圍では別に苦にはならぬが、斜目にルートをとつたり、狭くて急なため階段登りをせねばならぬ時は、雪が少しも締まらず、徒に同一動作を繰り返すに止まり、結局ぬいで歩く方が得策であつた。

七合目上の急な部分が終れば矢張りスキーの方が速かつた。神谷のへばりが快復せず、七合半位からもう日が暮れ始めた。と同時に今迄静かだつた樹林が急に鳴り出し、気温はぐつと下つていつた。森林帯を抜け出て裸尾根にかかるころは、風は私達の登行をかなり苦しめ、八合目を目前とする邊りでは既に二〇時、何處も風當りが強く、適當な場所が得られずして少し引返し、風當りの幾分ましな樹林の中にツェルトに依るピヴァクをする事にした。

風が出たため、よごれを拭ひとつた様な素晴らしい朝を迎へた。斯うしたフォーストビヴァクの朝は餘程早くより出發の準備にかかるものであるが、すつかり整備して其處を去るころは、例によつていい加減に時間は経過してゐた。

八合目の小屋跡までスキーをもちひ、此處よりアイゼンにかへ、スキーはルックザックに縛りつけて前岳の登りに取付いた。今日も神谷は遅々として歩みは鈍く、それに従つて繰り展げられた山なみを愉しみながら登りをつづけていつた。

前岳を越えて辿りつく玉ノ窪の小屋はいつものやうにその尾根だけを見せて居た。今日は本岳の頂上へおそくとも十一時ごろまでに登れると思つてゐたのに、此處で既に十一時を指してゐた。この調子で豫定の赤穂道へかゝるとすれば日は暮れるのは必定であるし、それには暖い食事を充分に攝取しておく必要を思つて、駒ヶ嶺と跡部が中岳の小屋へ先行して食事の用意にかゝる事にした。

いつも見なれた本岳からの展望もあらためて見直すこともなく、すぐ中岳の小屋へ下つた。

小屋を出る頃は、寶剣岳から伊那前岳への尾根にはやはらかい斜陽が黄昏どきを告げて居た。急いで前岳を越え、カンバが目につき出すあたりではもう脚元が暗くなり、森林帯へはいいる七合目の邊では夜空に星が瞬き、折柄の十五夜の満月が樺の影を雪面にくつきりと描いて居た。

雪質も此處でスキーに適する様

になつたので、アイゼンをスキーにかへて赤穂道の滑降に移つた。登りに苦勞した粉雪は滑降に向差支えないばかりか、快よい滑降感を誘ひ、重いスキーを持つて来た甲斐があつた事を互に悦びあつた。斜面は手頃であつたし、月夜にすくすく伸びてゐる黒木の間を縫つて行く心地も悪くはなかつた。勿論樹蔭は暗かつたが、ヘッドライトの必要は全然なかつた。六合目の一丁池は間もなく通過した。忠實に尾根に添つて滑降を續けていつた。そして惟ふ事は、これが晝間であつたらどれ程愉快であらうかと謂ふ事だつた。併しそれを言ふ前に月夜も、しかも十五夜の月光を浴びてゐることに對する感謝をなす必要があつた。だが矢張り赤穂道はさきに登つた時に抱いた木曾駒隨一のスキールートである事にはいささかの間違ひでないことを再び知つた。

した。此の附近は何處を降つても悪場のない事を知つて居たため、滑りいゝところを選んだのであつた。

右から小澤を加へると、清水澤はぐつと左へ曲り、そして流水を見せる様になつた。この附近、小あな雪崩のあとがあちこちに見られた。左岸通しにルート拾つて滑降を続けたが、明るいうちの行動なら興味も湧くし、能率も挙げられるが、月光があるとは言へ矢張り夜であつては思ふやうにはこぼす、時はそれと反比例的に経過し、自身では時間の感念は消え失せ、夜甚も超越して一切を天の配劑にまかせた様な氣持でシュブールを返つていつた。

清水澤は未知の澤であつたが、ほどの豫想がついてゐたので、ルートとして躊躇なく選んだが、勿論ちゝむさいところもあつたし、また感じのいゝのんびりとした處もあつた、けれど一度もスキーを脱がずに滑降することの出来たのは、限らない歡喜であつた。

可成り下ると時折り朽ちた木馬道(往年清水平から伐木、搬出した時のもの)を見かける様になり暫くして立派な木馬道が、この澤を横断してゐるのを見て、その上にあがつた。右岸に飯場があつた。此の木馬道を解放された様な

氣持でスキーを滑らせていつた。トップは走らなかつたが、ラストのスキーは樂に滑つてくれた。

此の木馬道さへ傳へばと樂な氣持ちで進んだものの、山腹を丁寧にかからみ、一向に高度の下らないのには全くやり切れない想ひであつた。此の木馬道は、冬期は別として、現在使用されてゐるものであるが、木材はその途中から架線に對岸に搬ばれてゐるらしく、その先は雜草が生え、次第に荒廢するにまかせ、二ヶ所も抜けて居た。前の抜けではスキーを脱ぐだけですが、二度目のはアイゼンを必要とするに至つて、それにもう黒川の發電所も間近な地形になつて來てゐるのに、木馬道は依然として高く絡んでゐたのでは、先が思ひやられて、アイゼンを穿いてゐるのを幸ひに、その先で木馬道を捨て、太田切川に面した急斜面の溝の様なところを降つた。遂に麓までして真下に見えてゐた發電所から取入口へ行く道に下り立つことが出来た。此の間の標高差は約二〇〇米位であつて、南面であるため雪は斑であつた。其處から發電所まではほんの僅かの距離であつた。發電所の小屋へはいつて暫く休んでゐると、夜が白々と明けてゆき、第三日目の朝を迎へた。

赤穂の町に入るところで、スキーを脱いだ。時には肩にかつぎ、ルックザックに縛りつけたスキーではあつたが、上松から赤穂まで駒ヶ根橋からは次第にはかない積雪であつたけれど、とに角スキーを充分に愉しめた事、それにもまして木曾駒の雪のたゞすまいの好ましさに對して深い満足と喜悅とをそつと抱き締め乍ら。

【パーティ】 中澤、駒ヶ嶺、神谷、跡部

【時間記録】 昭和十六年二月十日 上松(二、四五)―二合目(五、二〇)六、四〇―五合目(一一、一〇)―二、一〇〇―七合目(二八、三〇)―引返點(二、〇〇)―ビヅク(二、〇三)

二月十一日 ビヅク地(八、一〇)―八合目(九、一〇)九、三〇―玉ノ窪小屋(一一、〇〇)―二、二〇―本岳頂上(一四、〇〇)―中岳小屋(一四、三〇)―一六、三〇―前岳(一七、三〇)―七合目(一八、一五)―清水澤標高約二〇〇米(二二、二〇)

二月十二日 木馬道(一、〇〇)―黒川發電所(五、三〇)六、二〇―赤穂(八、三〇)

(跡部昌三)



スウイス版「民族の足」

―ハイム教授の所論に對する批判など―

水野 祥太郎

Die Alpenの本年一月號の雜報欄に「靴か、足か?」と題するハイム教授の小文が多數の圖解入りで載せられてゐる。

大體の論旨を紹介すると、「文明人の足は靴のために甚しい害を受けて多くの疾患を齎らしてゐる。特にこれは婦人に甚しい。

然し幸ひにして未だ我々の子供が不具の足を以て生まれる迄には害が及んでゐない。子供の靴は特別の形をしてゐる。これが六歳を超えると、Modeの入つた形となり足は歪められる。戦前アメリカ製の靴で異型のものがあつたが、探

しても見當らなくなつた。靴型(boot)註、木型のこと)は自然の足に合はせねばならない。自然の足が如何なるものであるかに就て、私は最近の旅行に際して注意を拂つて見たが、圖の如く民族の如何、身體の大小を問はず、原則的には極めて一致してゐる(圖は、ハイム教授自ら記録した土人の足形六ヶを並べてゐる。ネパール人の一例以外はニュー・ギニア附近のもの)。

即ち、(一)内縁は直線か、むしろ凹形をなし、跗趾が中趾の方に押し付けられる様なことはない。(二)足の最大幅員は跗趾―小趾間にあり、各趾は離開してゐる。(三)跗趾は強く握むことが出来、登りの際の後退を防ぐ。(四)蹠の關節は頗る柔かく、蹠全體を地につけた儘、榮々と蹲居むことが出来、その際床面と下腿との角度は三十度以下に迄低下する。

右に應じて靴の形としては、(一)内縁の直線的なること、(二)最大幅員は跗趾、第五趾間、(三)跗趾の運動をなし得る高い「サキ玉」(爪先の固い革)、(四)低い踵、が要求される。ハイヒールの婦人靴は全くこの要求と反對である。文明社會にあつては、流行を捨てよよりは病氣

に強つた方がマシだと云ふ者が多いだらう。しかも流行と云ふものは理窟はないのだ。

男子の靴、特に軍靴や山靴は他のものよりはマシであるが、矢張り踵趾を内側に壓迫する。

御承知の如く靴で痛めつけられてゐない日本人や支那人は却て良いランナーだ。支那人は粗食をして、裸足で一日百軒も客を乗せた俵を走らせたり、悪路を百軒も百五十軒も擔いで三千里の峠を毎日越える。日本人は下駄に鼻緒をつけて趾を擡げる。これに似た「Semi-pa」はインカの土人か、ガリシヤ人、ローマ人もつけてゐる。靴下も手袋のやうなものが宜い。獨逸でやつてゐる様に左右は別々のものを作らねばならない。日本のマラン・ランナーは踵趾の分離した半靴を穿いてゐる！

博覧會などで靴の改革を圖らうとしても無駄だ。大生産者は決して理想論を聽いては呉れない。僅かに個人商店たる「Vacher」によつて「Oligo」靴として製作されたが、この靴は決してブザマではなく、宣傳次第によつては充分流行見ともなれるだらう。然し乍ら現時の流行は頗る根深くて、これが改革は容易ではない。Weigen の F. Molitor も私に従つて山靴を作つた。こんなキツカケで靴改革の緊

急の要に就ての一般認識が深まり山岳會が全文明人類の健康に對して決定的な轉回を持ち來らすことともなれば幸である。自然に還れ！と聲を大にして叫び度い。」

ハイム教授は傑出した地質學者であつても解剖學者でもなく、整形外科醫でもない。従つて此所に紹介した所論の當否に就ては多くの保留が附されねばならない。しかし乍ら、現在の整形外科學は、尙いまだこの靴の問題に就いて多くの未解決の點を遺してゐる。獨逸や米國邊りの研究者は、ハイム教授と同じく自然人の足を無條件に理想的なりと考へてゐるものが多い。ハイム教授が素人なるが故に唯一人その様な素朴な議論を唱へてゐる譯ではない。これ等の人の理由とする所は頗る簡單である。「足痛なる疾患が文明社會の副産物であり、原始生活人の間にはかゝる疾病は存しない。これは文明人の足が靴のために一種の不具狀態に陥つてゐるからである（支那人の纏足を笑へない！）靴を穿かない自然人の足を我々文明人にとつての理想である。」といふにある。

近年の整形外科學會を見ても獨逸アメリカ共に足痛に關聯した問題は頗る多く、底の柔軟な山靴が學會で展覽された記録も見受け

る。しかし、その十中九迄は「自然人の足」を理想とする先入主にとらはれてゐる。我々日本の外科醫にとつてはこれ等の議論はいささか奇異の感なきを得ない。我々日本人は一日の中、幾時間かは流汗型に屬する靴を穿く。しかしながら、更に多くの時間、我々は疊の上で自然人の生活を樂しみ、足の筋肉の鍛鍊効果は幼少時よりの累加によつて到底歐米人の短時間の附焼型的 Gymnastic の及ぶ所ではない。趾で物を挟んだり、爪先に力を入れる位のことは我々には何等の練習もなくして容易に行ふことが出来る。それでゐて我々の間にも、足痛の患者は決して少くない。否、靴を穿いた経験のない田舎出の職工にさへ、立業に當つて少からぬ足痛（Faschschmerz、Foot Pain）を見る。一老工場醫の語る所によれば、凡ゆる醫藥効果よりは工場法による労働時間制限がモノを言つて、忽ち患者数を五分一に減じたと云ふ。これ等の事實は何よりも足痛の問題が靴よりも足自身の問題であり、より正しく言へば、足と生活環境の問題であることを物語つてゐる。自然人の足を文明人の生活環境に置いて見た場合、果して歐米人の云ふ理想の足のまゝで居れるか否か。私には本邦人に於ける事實が既にこ

の歐米學者の根深い夢想を打ち碎いてゐるやうに思へるのである。これだけの解説を念頭に置かれるならば、ハイム教授の所論が素人の言葉に過ぎないことは容易にうなづけることと思ふ。日本人の中には優秀なマラン選手が居ることは確かであつても、平均してスウイス人といづれかと言へば、高度馴致の度の高い彼等の肺活量の方が或はモノを言ふかも知れないのである。「踵趾の岐れた半靴」を常用することがマラン選手の輩出とどれだけ關聯してゐるだらうか。

と一廉偉さうにハイム教授の所論を一蹴した處で、實の處整形外科領域に於て足の問題はまだ未解決で残つて居り、靴の問題も世を擧げて（？）研究を進められてゐながら、解決點には至つてゐない。最近のドイツ整形外科時報は靴の改革に對する古文獻の再紹介を開始し、足の研究を以て有名なフランクフルトの整形外科でも全くの初手から、足のレントゲンの研究をやり直し出して居る。毎年の學會に於ても彼地にあつては少からぬ演題と討論とが足のため

に費されてゐる。本邦にあつても新聞紙の報ずる所によれば、京大衛生學教室が靴の問題の研究に着手されてゐる由であり、本年の整形外科學會に於ては、二日午後は殆ど足の問題に費され、日醫大齊藤一男教授一門の演題と、阪大小澤外科の小生一黨の演題が相並んでいさゝか注目惹き、今後、日本から世界の足の問題に寄與する處あるべき大業績の出現さへ豫想されてゐる。私は寸暇を得れば

「山岳」原稿募集

「山岳」第三十六年第一號は大體會報第一〇四號掲載の内容を以て編輯を了り、目下校正中でありますので、會員諸氏の御手許にお送り出来るものも程近いことと思ひます。

「山岳」の内容等に關し會員諸氏より忌憚なき御意見をうかがひたく、本會報紙上にとし御發表下さい。

尙第三十六年第二號の締切は八月末日であります、精々御寄稿の程期待してをります。

（山岳編輯係）

アクチヴな山岳人に二三の小實驗を試みて戴き度い腹案を持つて居る。やがて本邦にあがべき靴改革の烽火に、登山家が役を買ふと云ふのも愉快ではあるまいか。

斯う云ふ理窟は私のみの我田引水論であらうか。（一六・四・一一）

社団法人 改組記念 講演と映畫の會

六月二十日 午後六時
九段 軍人會館に於て

一、講演「山に省りみる」

會長 木暮理太郎氏
一、講演「山と生活」

會員 柳田國男氏
及「富士の地質」

會報に豫告されてゐた右記念講演と映畫の會は豫定通り催された。當日は天氣の定まらない梅雨の時候の中で幸ひ雨は降らず朝は涼しかったが夕方少し蒸し暑かった。木暮氏の講演は演題の通りこの古くから多くの山々を歩き、今もなほ絶へず山を好む人の語るに相應しいものであった。別に人を指導しやうとするやうな激しい言葉つきもなく、誠に心易いものであったが、かへつて心を打つものがある、又その若々しさを人は特に感じた事であらう。

話の中に、山に接するには山小屋等に泊るよりも、むかに地上にねるのがよく又一人が一番よいが、それには少し位の事にあはてない、又風雨に曝されても參つてしまはない強い精神や身體が必要であると言はれ、まづ一人一人が

その教養を深めて行くのでなければ、團體といつても烏合の衆となり易く、特に山登りに於てはそうであるといふやうな部分には、私は大いに同感なのである。

柳田氏の講演はその専門とされる民俗學の方より、山と人の生活との交り話を話されたのであるが、殊に山に對する信仰心や山の神様に關する諸説に就て述べ、更にそれらの山々が祖先から我々にのこされて來てゐるものである事を説かれたのであった。聴衆の中には既に同氏の多くの著書を通じて近づきを感じてゐるものもあつた事であらう。私も「民謡覺書」等を愛讀した一人である。「亞細亞大陸横斷」は一九三一年に行はれたフランスのシトロエン自動車旅行の記録映畫である。私は以前にもこれを見た事があるが、誠に興味深く又何とか一言したくなるのである。

或人が當夜の聴衆の印象を談つた。私も、私の近くに明らかに目の不自由な人が娘と思はる人に手を引かれて入つて來たが、耳に手をあて、身體を乗り出すやうにして聴いてゐるのが目に映つた。講演者の知合の人であらうか、又は以前多くの山を歩いた人であつた

らうか、と思つたのである。當日の講演は何れ本會に於て活字にする豫定である。尙來場者總数は約一千名、内會員約三百名の盛會であつた。(田邊主計)

★

關西支部第一回研究會

五月十六日 於清交社

題目「食糧」司會 前田幹事

時局下我々の食糧に關する常識はもう一度清算されざるを得なくなつた。より良く、より軽く、より耐久性ある物は殆ど市場から姿を消し、小期間の登山に於ても食糧の買込みに買溜と間違へられつ狂奔せざるを得ない状態である。より高き登高へ備へる爲の食糧研究と共に、我々は現實に備へる爲の食糧研究を行はねばならず、會での山糧に對する懷古的愛着をかなぐりすて、何を利用すべきかを眞面目に考へなければならぬ。此の意味に於て第一回研究會に於ては、常識としての營養化學と非常食糧に主力を注ぎ、出席者のいさゝか少なかつたのは残念であつたが、種々の意見が各人から出て有意義な會合であつた。結果は追て取纏め會報に發表する心算であるが、取敢へず中間報告を左に示す、杜撰な點は諒とせられたい。

「營養化學の概念」 前田光雄

主として食分折表の成分含有量、カロリー(利用カロリー)の解釋法、食物の酸性・アルカリ性、食物の消化吸収、高度及食糧によるアチドージス等に就き、更に今後の食糧は干魚と野菜に重點を置くべしと提唱。

「非常食糧」話題に出たもの。

- ①アンパン(離で密閉) ②同油あげ ③食パンの油あげ ④栗おこし ⑤切餅 ⑥櫛 ⑦甘納豆 ⑧芋を入れて搗いた餅 ⑨葛粉 ⑩陸軍壓搾口糧 ⑪陸軍乾麵 ⑫堅パン ⑬ソバ粉 ⑭ハツタイ粉 ⑮鰯・貝柱・干魚の類 ⑯乾果 ⑰バター・ナッツと乾果の混合 ⑱チョコレート・黒砂糖・金平糖の類。

外に變つたものとして ①メリケン粉其他の穀類を粉にしたもの

- ②干魚等の粉 ③野菜の廢物(例之大根の葉等を天日で乾し粉にしたもの、の三つを混合し持參し、

①水で練つて胃へ流し込む②煎餅を拵へて焼いて喰べる③鍋に油を

ひいてホットケーキとする④團子を拵へて汁の實とする、等々。

ビーナツツバターの自製及利用法。乾杏(ドライアップリコット)の代用として梅干粉と砂糖をまぜたもの。

汁のだしとして醬油で昆布と雑

魚を煮詰めたものを用ひる。

「野生草木の利用」紹介文獻

1、救荒本草

2、東北地方に於ける救荒食物

3、救荒食物……農業及園藝

(昭一三五)

4、服部健三博士 食用植物學

此等は非積雪季しか用ひられないが一應の問題として取上げるに充分で、出席者中の利用されたものは、岩苺・蔞・アザミ・スギナ・オホバコ等にすぎないが之も將來もつと殖える事と思ふ。尙非常に際し草木の若芽等を喰べるに際し、アクの強いものは煮出し、汁の上に浮いたものにビーナツツバターを加へ、ぬたとして喰べる方法紹介さる。

「代用食」

米の不足、パンの不足を補ふ爲うどんは落第の模様だが、學生の方の報告として、朝オートミル、晝栗おこし、夜飯で行動した所、腹がへつて仕方がないので朝晩をふりかへると大分しのげるとの報告あり。

(出席者) 中原繁之助、山口季次郎、津田周二、金井健二、前田光雄、小山秀雄、阿江正造、富田健一、小川正十郎、影山寅造、栗飯原健三、湯淺巖、大阪商大八名、關西學院六名、神戸商大一名、會員外三名。

九重山

筑紫山岳會編
同會發行

介紹書

『九重山』が此の程刊行された。總説編に於て九

重の人類との交渉の沿革、地形、地質、地名考、生物、温泉、氣象、傳説、史蹟、登山編として所謂、登山案内、根據地、山小屋を擧げ趣味編に於て早川、北尾（大毎より轉載）外數氏の九重の紀行、隨想、詩歌、狩獵等を網羅するといつた極めて間口の廣いもので、その刊行の目的である「一般的なる九重讀本」であると共に「一般的なる登山の高級案内書」（同書九五頁）といつたものであらうか。扱同書の三分の二を占める膨大な總説編に比し、案内書として重きをなす可き登山編は案外あつさりと片附けてはあるが、要領を得てゐる。巻末の五萬分陸測圖を基準にした登山地圖も洵に結構ではあるが、主要コースに就ては概念圖挿入が望ましかつた様に思ふ。「登山の仕度」に就ての一編があり、四季夫々の準備と婦人の服裝なるものがとりたてゝ書いてあるなどは九州らしくて微笑ましくなる。紀行文も單に春や夏のそれを載せるだけでなく、いろんな季節場面を採

擇した紀行文を今少し重要視して豊富にしてもよかつたと思ふが、これは筆者の趣味からであらうか。巻題、福原氏を主とした七葉の寫眞は製版は別としてなかく結構である。頃來岳人以外にも四季を通じて九重を訪うもの漸く多く、斯うした総合的な山記の刊行は、同會の「あせび小屋」の完成と相俟つて、九重山群に一層の心やすさを感じしめるのに役立つこと大であらう。仄聞するに同會からは筑紫叢書の續刊として「九州背稜山脈」「霧島」「阿蘇」等の各編が上梓される由で、此の種山岳文獻の多くない地方だけにその成果は期待される處であるが、願くば然る可き書肆から適正値段で頒けられんことを此の際希望しておく。

(坂江善治)



會務報告

六月役員總會報告

六月五日(木)午後六時半、於虎ノ門事務所
出席者 鳥山、茨木、沼井、中司

加藤、角田、黒田、逸見、横山、山口、村尾、望月、青木、前田、塚本、委任二十名
(議長 鳥山理事)

一、關西支部報告(前田幹事)

(イ) 關西支部役員集會に於て本會の方針決議ありたる旨報告。

(ロ) 關西支部委員委嘱の件可決

栗飯原健三、木藤精一郎、入江保太、直木重一郎、小川正十郎、富田健一、西岡一雄、山中正之助の八氏(前號十頁記載分は本號通り訂正)

(ハ) 支部の圖書充實の爲本部にて餘分のものあらば移管せられたしと要望あり、圖書係善處することゝす。

(ニ) 會報に一頁程度の支部欄を設け編輯して會報係に送付するの件は實施のことゝす。

(ホ) 法人改組記念講演映畫會を關西にて開催するの件は、入場料にて費用を支出し得ば差支へなし。

(ヘ) 役員會出席の爲の旅費は關西支部費以外に支出されたしとの要望は俄に決定し得ず考慮しをくことゝす。

(ト) 研究會を毎月第二金曜に行ふ。

一、岳聯の現状報告(角田評議員)

(イ) 地方聯合會の組織進捗中。

(ロ) バツヂ、登山手帳の制定中

(ハ) 精神訓練を主としたる指導者養成講習會開催着手。

一、山日記編輯方針(山口幹事)

(イ) 昨年と大體同様の編輯方針

(ロ) 山岳遭難救助機關を整備、登山日程の追加、登山團體表の充實、山小屋欄擴大、地圖の増加、外國の山の高度表復活。

(ニ) 軍機保護法は登山に直接關係ある拔萃を作られたしと要望

(ホ) 高山植物一覽表の掲載方要望。

一、支部規定細則の決定(沼井評議員)

本日にて決定案成る。會長に相談の上成文として發表すること

一、會員増加の爲會員に依頼狀發送の件(塚本幹事)

塚本幹事案の依頼狀二三訂正を要望、訂正の上會長其他に相談の上發送することゝす。

一、六月二十日講演映畫會報告(塚本幹事)

(イ) 招待券は一枚限り東京附近在住會員に送附、官廳關係に招待狀を出すこと。

(ロ) 一般入場料は五十錢とす。

(ハ) ポスター、チラシは一兩日中出來の豫定。

(ニ) 當日の係を決めること。

一、高山深谷編輯報告(塚本幹事)

約百點選擇済にてアルスに引渡済。

一、山岳三十六年一號編輯報告(逸見幹事)

大體會報一〇四號掲載の内容にて原稿印刷所へ回付済。

一、學生懇談會報告(望月幹事)

五月二十日、第三回開催、近く第四回會合開催の豫定。

一、登山用具資材配給申請の件、結論つかず次回再審議。

一、登山年譜編輯方針の件(望月幹事)

編輯の根本方針は本會會長を委員長とする五月二十三日の委員會にて左の通り検討されたる旨報告。

「各山脈地域別毎に可然き擔當者を委嘱し文獻の蒐集と並行し手近な文獻より早速涉獵し、基本カードを作成すること」

右には異論なかりしも會員の登山經歷をも併せ蒐集すべしとの論出で今一應検討すること。

一、議決事項の報告(沼井評議員)

議決事項にて實行したるや否や未解決のもの相當あり。これに解決を與へられたき旨要望、善處整理することゝす。

一、「山と生活」刊行豫定の件(塚本幹事)

明年「山と生活」と題する寫眞集を刊行したき提言あり。可決。

一、山小屋に關する圖書刊行の件(加藤評議員)

「山と生活」刊行豫定の件(塚本幹事)

明年「山と生活」と題する寫眞集を刊行したき提言あり。可決。

一、山小屋に關する圖書刊行の件(加藤評議員)

厚生省にて山小屋調査中なるを以て右完了の上その材料を以て本會にて圖書刊行したらばと提案、考慮することゝす。

一、入會申込者左の通り承認

中村徳郎、藤田親昌、藤田正夫
田中實、村井忠一、赤沼成一、
鳥居亮、大阪高校山岳班、小野
庸、竹田隆昌

關西支部報告

本會社團法人改組後、既發表の役員は支部ルムに數回の會合を重ね、舊役員との事務引續及び本會の將來に就いて談合をなした。それと共に本部との密接な連絡を必要とする爲に、私的に或は公的に文書の交換及び上京をなして意思の疏通を計つた。

四月十八日、前號記載の通り關西會員大會を開催して、委員を決定し、關西在住會員の協力を求め本會の益々強化發展への基とした其の後第一回の正式役員總會を左記の通り開き、支部今後の方針其の他を打合せた。

支部役員總會

五月五日(月)六時半支部ルム出席者 中原、松井、前田、湯淺小川、西岡、栗飯原

議事

- 一、日本山岳會支部規定(案)檢討
- 一、關西支部内規立案の件
- 一、本年度關西側事業の件

左の通り決定をみる。

研究會—原則として毎月一回開催のこと。

小集會—原則として隔月開催のこと。

通知は會報紙上。但し第一回のみ關西在住會員全部に葉書にて通知。

一、會計幹事選任の件

松井久之助幹事に決定。

右の決定事項中研究會は毎月一回開催するを原則とし、役員總會に於て議題を選定し、會員が各自その題目に就いて經驗を語り、研究を發表し、批判し、會員相互の向上を計ると共に親睦の實を擧ぐるを目的とするものである。或は又同じ目的の爲にその道の大家を招き、専門的方面の話を聞きそれに對する質疑應答の會も加へる考へである。研究會の形態、進行方針、運用、成果等に關し、この會が回を重ねるに従つて徐々に變化し、充實したものにしてゆきたい考へである。色んな計畫があるが、これは何れ發表の時期があらう。最初の間は一般的問題から研究し合ふ事となり、第一回研究會(別記参照)は「時局下の非常食糧に就いて」と決定した。

終身會員ニ變更

菊地正藏(會員番號一〇七八番昭和三年入會)昭和十六年度ヨリ終身會員ニ變更

名稱變更

成蹊高等學校報國團鍛鍊部山岳班(舊稱旅行部)
臺北高等學校山岳班(舊稱山岳部)
高知高等學校南溪報國會山岳班(舊稱山岳部)

圖書基金寄贈

一口 一金五圓也 進藤波男氏

圖書寄贈

一、山へ開く窓(勝見勝著)朋文堂發行

右 勝見勝氏

一、石楠花(東京登歩溪流會編)

右 東京登歩溪流會

一、分類山村語彙(柳田國男、倉田一郎編)信濃教育會發行

一、分類漁村語彙(柳田國男、倉田一郎編)民間傳承の會發行

以上二冊 柳田國男氏

一、新聞切抜帳・アルバム十四冊

右 木村鐵吉氏

一、霧氷圖(袋一平著)同倉書房發行

右 袋一平氏

受贈會報雜誌

津峠の會 誌二十八號

熊本アルカウ會 會報五月

山岳巡禮俱樂部 ガムス五月號

明峰山岳會 M M C 六號

白樺旅行會 白樺一〇九號

沖電氣山岳部 部報六月號

東京發行會 T T K 六月

山毘古會 山びこ五月六月

雁ハイキンググループ 雁五月

廣島山岳會 會報六月

東京市山岳部 年報五號

關東旅行俱樂部 旅路六月號

橫濱山岳會 會報六月號

東京山ノ會 會報六月號

大日本山林會 山林六月號

鷗翔山岳會 會報二七號

東京アルカウ會 會報六月

日本厚生協會 厚生の日 六月

登山とスキー社 登山とスキー六月號

關東山岳會 會報六月號

朋文堂 山小屋六月號

東京登歩溪流會 會報六月號

東京地學協會 地學雜誌五月

臺灣山岳會 彙報六月

東京實屋山岳部 部報六月號

武藏山岳會 登山六月號

晴山ヤマノ會 晴山五月號

日本アルカウ會 アルカウ趣味六月號

第四高等學校報國團鍛鍊部山岳班

銀嶺山岳會 會報六月

大阪探險俱樂部 白峯六月號

The Geographical Journal, March 1911.

Die Alpen, Mai, 1911.

組寫眞集

「山と生活」寫眞募集豫告

高山深谷第十輯の寫眞募集に際しまして全國から七百餘點に上る應募を得ました事は、本會として厚く御禮申上げたいと存じます。目下鋭意刊行準備に取りかゝつて居りますから、近くその成果をお目にかけられる事と思ひます。何卒御期待を願ひたう存じます。

其處で次の計劃でありますが、明年初夏を期し組寫眞を主とした寫眞集「山と生活」を刊行したく準備を始める事となりました。今の内から明年の出版界の情勢を判斷する事は困難ではあります、もし幸にも出版が可能であれば是非刊行したいものであります。萬一出版の可能性がなくなりました場合は、東京を初め全國數ヶ所に於て寫眞展覽會を催す事にする積りであります。それにつきまして會員各位の御支持を得てその目的を達したく、この夏山から御準備の程切に願ひ上げます。

案

一、「高山深谷」同様の山岳寫眞も募集致します。

一、大體十五枚以内を目標とした、組寫眞「山と生活」を主として編輯致したいと存じます。それは、山と人の生活とを結びつけたものを目安とするものでありまして、例へば山麓人の生活と山とを結びつけたもの、或ひは一つの登山の記録、合宿生活の様態等、そのテーマは作者の獨創的考案にお任せ致しますから、何卒山岳寫眞界に一新紀元を劃するやうな組寫眞を創作下さるやう、切に願ひ致します。

一、右の組寫眞は四季に互り角度の異つたものを希望します。

一、募集締切 明年四月上旬の豫定

一、採用組寫眞は十種以上の豫定

一、採用の寫眞には相當の謝禮を致す豫定です。

一、奮つてこの夏山から御準備下さい。

昭和十六年七月

社團 日本山岳會

第六十 山と溪谷 發賣中

(一部七〇錢・送九錢・年報六部送共四圓十錢)

利根の山川、山の寫眞、山小屋雜感、火を焚く術・小屋を作る術、加奈陀新山岳地帶航空記録、東北の山、丹澤水無川遺難救助報告、雄阿寒岳、カラコルム一九三九年、近畿の山、はひまつの波、名案人物語、高山植物隨想、越中五ヶ山の熊取り、八甲田に新ルートを探る、美ヶ原と三城牧場、野獸奇談、山案内人座談會、夏山と夜鳥の鳴聲、尾瀨景鶴山の山名、夏季登山案内五案、山岳傳書鳥講座、大水上山から中ノ嶽・駒へ、大荒川谷溯行記、仙ノ倉谷の奥、南會津朝日嶽紀行、利根源流の谷々、其他滿載

山溪選書第三編 尾瀨と日光 七月中旬刊

規格B6判・塚本閣治裝幀特製・定價貳圓參拾錢・送十四錢

(概論) 奥日光概説 川崎隆章、(地形) 日光・尾瀨・南會津の地形 安齋徹、(地質) 奥日光の地質 大塚昌彌、(植物) 尾瀨地方の植物 館脇操、(科學) 尾瀨の科學 安達成之、(傳説) 南會津に於ける高倉宮御舊蹟 柳田國男、(考證) 尾瀨の昔と今 木暮理太郎、(土俗) 尾瀨地方の土俗雜記 金子總平、(文學) 尾瀨の四季 平野長英、(案内) 尾瀨日光登山案内 矢島市郎、(研究) 日光開山と勝道上人其他 武田久吉

塚本閣治山岳寫眞選集第一輯 日本山々 七月下旬刊

規格B5版・總アイト刷・定價五圓(送料廿二錢)

(卷頭寫眞・五度刷原色版) 岩稜に咲く花(北鎌尾根より笠ヶ嶽を望む)
(春) ①中央アルプス空木岳 ②後立山五龍岳(八方尾根・遠見尾根・安曇野)
(夏) ③北アルプス北鎌尾根(高瀬川入り) ④南アルプス赤石、荒川、鹽見 ⑤秩父眞ノ澤から甲武信岳へ
(秋) ⑥南會津田代山 ⑦北アルプス餓鬼岳 ⑧丹澤水無川湖行鍋割山
(冬) ⑨草津から上信國境スキーツアー ⑩八甲田スキー行
⑪氷雪の殿堂雲龍溪谷の湧行

東京市芝區田村町 山と溪谷社
振替東京六〇二四九

★編輯だより★

暑さに向ふ折柄涼味を求めてと云ふ譯ではありませんが、今月號には積雪期の登攀記を二つ並べてみました。木曾駒の方は次號で完結いたします。

地方會員諸氏よりの寄稿が最近減つてきました。切に御執筆の程祈ります。論説、隨想、翻譯等勿論歓迎ですが、何よりも實際の登山記、紀行及び研究發表等を希望いたします。(望月達夫記)

八月中國書室開室時間

月水金 午後六時—九時

火木 閉室

土 午後一時—五時

昭和十六年七月十二日 印刷納本
昭和十六年七月十五日 發行

日本山岳會内 頒價 二〇錢

編輯兼 塚本 繁松
發行所 東京市芝區平町二(不二屋ビル)
電話(芝)四三三・一六四九

振替東京四八二九
印刷所 植田 庄助
成文堂印刷所

東京市神田區淡路町二丁目九番地
配給元 日本出版配給株式會社

社団法人 日本山岳會財産目録 (昭和十六年二月二十八日調)

一、資産

總額

一七、六三九・一六

基本財産 七、七九三・一七
普通財産 三、三七二・一九
外ニ普通財産備品及圖書ノ價格 六、四七三・八〇

二、資産内課

(一) 備品及圖書(評價額)

資産種別

備品 數量 價目格

備考

考

内二八個(一五〇圓)ハ關西支部保管

内四五冊(二二五圓)ハ關西支部保管

内三五冊(三五圓)ハ關西支部保管

原板七〇〇枚ヲ含ム

四、〇三・〇〇

三、一七・五〇

六、一五・〇〇

二、五六・〇〇

六、四三・〇〇

八、八三・〇〇

三、一七・五〇

四、〇三・〇〇

三、一七・五〇

六、一五・〇〇

二、五六・〇〇

六、四三・〇〇

八、八三・〇〇

三、一七・五〇

四、〇三・〇〇

三、一七・五〇

六、一五・〇〇

二、五六・〇〇

六、四三・〇〇

八、八三・〇〇

三、一七・五〇

四、〇三・〇〇

三、一七・五〇

六、一五・〇〇

二、五六・〇〇

六、四三・〇〇

八、八三・〇〇

三、一七・五〇

計

(一) 有價證券 ナシ

(二) 預入金

(三) 預入金

資産種別

基本財産

金 錢 信 託

振替貯金基本金

普通財産

小計

特別當座預金

振替貯金

借入金

同

合 計

(四) 現 金

資産種別

普通財産

金 錢 信 託

振替貯金基本金

普通財産

小計

特別當座預金

振替貯金

借入金

券面額又ハ殘高

利率

備考

年三分六厘

内一〇圓ハ關西支部加入

七、七三・一七

一、八六・四三

百圓ニ付日歩六厘

内三圓四二ハ關西支部振替貯金殘高

八三・八三

無利息

不二屋ビル借室敷金

三〇〇・〇〇

大阪貯蓄銀行借室敷金

一〇〇・〇〇

同

三、一三・七

同

一〇、九一・四

同

三、一三・七

同

一〇、九一・四

同

三、一三・七

製布水防麻

キスリング型(E式)

ルックサック



★品質優秀責任保證★

布地見本進呈

特大 二尺二寸 二七・五〇

大型 二 尺 二五・三〇

中型 一尺八寸 二三・一〇

小型 一尺六寸五 二〇・九〇

◆ハイキング用肩掛バッグ 三・七〇

◆門田製シュタイクアイゼン在庫品豊富 (公定價格九・五〇)

◆テルモス各種・ハイキング用品

東京市神田區神保町三ノ一(専修大學電停前)

片桐テント登山具店

電話九段(33)三二一〇番
振替口座東京九一八四番